

## 要 旨

### FtX のジェンダー・アイデンティティの形成過程に関する考察

木村 麗

日本では 1990 年代後半から性同一障害という概念が導入され、注目を浴びていた。しかし、同時期に、男女という固定した立場をとらない「X ジェンダー」という概念が成立してきた。そのような人たちは、どのようにして自分を X ジェンダーと位置付けることになったのだろうか、本研究ではそのプロセスの考察を行った。X ジェンダーのなかでも FtX (Female to X) (出生時の性を女性と割り当てられ、X ジェンダーを自覚する人々) が圧倒的に多く見られることから、今回は FtX の人々を対象にインタビュー調査を行った。本論文を通して、人々が X ジェンダーに向かうプロセスに迫ることで人々が持つ性の多様性の諸相を提示し、誰もが自分の価値観を大事にして生きることのできる社会を作る糸口になることを目的とする。

分析方法は、幼少期から X ジェンダーへの自覚に至るまでの性別をめぐる経験についてのインタビュー調査を行った。録音したデータを逐語録に起こしたのち、協力者の重要と思われる「性にまつわる経験や思考」に関する発言に焦点を当てて、共通点や相違点を検討し、どのような経験が X ジェンダーという自覚に影響しているのかを考察した。第 1 節、小学生を含むそれ以前、第 2 節、中学校高校、第 3 節、高校卒業以降の順に考察をまとめている。

インタビュー調査の結果、まず小学校を含むそれ以前では特に、女性らしい服装を着用させられる嫌悪感を抱いた経験が多く聞かれた。中学高校では、女性として顕著に成長していく体への嫌悪感、男女二分された学校の環境の変化に葛藤、そして同性への恋愛感情への気づき 3 つを経験している人が多く、セクシュアリティと向き合う大きな転換期になっていると解釈できた。セクシュアリティの模索をする過程で、性同一性障害者は手術を行いたい人という固定化されたイメージを持つとともに、自分は性同一性障害ではないと考えに至っている人が多かった。この性同一性障害ではないと思いは、X ジェンダーに向かう重要な分岐点であると考察できる。高校卒業

後では、会社内での環境、また男性との交際のなかで女性として扱われることに多くの協力者が嫌悪感を感じていた。現代の社会の中で女性として扱われる嫌悪感は、女性であることの違和感をさらに助長しているようにも伺えた。また、インターネットを通して、X ジェンダーという概念に出会った人が多くみられ、自らを X ジェンダーに位置付けたことで、ほとんど全員がどこにも所属できない不安からカテゴリーに所属できた安心感を得られたことが明らかとなった。

本研究では、協力者間の共通した経験が見られたが、協力者のライフストーリーは一筋縄ではなく、協力者全てが複雑な、また個別的なプロセスを経験していた。X ジェンダーは、男女の枠組みにとらわれない人達の居場所として非常に許容力を持ったカテゴリーであることが見て取れた。この X ジェンダーというカテゴリーは、人類史上長く続いてきた男女二元論に一石を投じるものとなっていくだろう。